

インターネットの効用

ライフデザイン研究所 所長
加藤 寛

WIDEという知る人ぞ知るという研究団体がある。森前首相がIT革命という言葉で全国的に広めたが、実はこのWIDEという研究グループが日本のインターネットを理論と実践の面から促進してきた功績ははかり知れないものがある。

その発展をリサーチしてみると、こんなことが述べられていた。WIDEとはWidely Integrated Distributed Environmentsの略。地球上のすべてのコンピュータを接続し、人類全体に貢献しうる分散システムとして機能させる場合に、どのような技術が必要で、なにが問題なのかを追求するという研究の初期ガイドラインに基づいてスタートしたのがWIDEプロジェクトである。

WIDEプロジェクト活動における大規模広域分散環境の基礎となる研究課題には、コンピュータネットワーク、オペレーティングシステム、分散処理、耐故障システム技術、セキュリティ技術、マルチメディア情報処理、グループウェア、コンピュータ教育、そして、インターネ

ットなどのさまざまな分野がある。WIDEプロジェクトの目指す次世代のコンピュータ環境を構築するためには、これらの研究分野で本来追求されていた目標にとどまらず、これらの分野の総合的な研究成果を目指さなければならない。ここに、われわれがプロジェクトとして協力し、相互に議論ができる体制をもっている意味がある。

こうしたインターネットの一員として、WIDEインターネットは、札幌、仙台、東京、八王子、藤沢、浜松、北陸、岐阜、奈良、大阪、京都、広島、福岡、サンフランシスコにおいてWNOC (WIDE Network Operation Center) を運用し、それらを拠点とし、約140の組織との共同研究基盤を構築している。このWIDEインターネットは、2本の国際専用回線を用いて国際的なインターネットとの相互接続を実現している。プロジェクトのメンバーは、570余名の研究者であり、学生、大学関係者、企業の研究者を中心に、インターネットを介した活動

を続けている。運営は20人のボードメンバーによって行われていて、毎月のボード会議、2ヵ月に1回の研究会（このうち年に2回は合宿形式）で会議を行っている。実際の活動は22のテーマごとにワーキンググループとして分かれて行っており、それぞれの問題意識を追求するために日常的な活動はグループごとにすすめられている。

というわけでこの研究会が千葉商大の市川国府台キャンパスで開かれることになった。何故、こんな最先端の研究会を、理工系でもない一地方大学で行うかという疑問がでるかもしれない。たしかに千葉商大は数年前までは、IT時代のほんの片隅の存在であったが、慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス（SFC）に刺激され、情報教育に力を注ぎ、SFCの院生や学生をTA（Teaching Assistant）・SA（Student Assistant）として招き、情報基礎を必修課程とした。

このSFC方式の導入は大成功であっ

た。瞬く間に学生はコンピュータに習熟し、Eメールがタテ・ヨコ・上下にとびかうようになり、千葉商大のコンピュータ教育は高く評価されるようになった。理工系でもない一文科系の大学が、メンテナンスもままならぬのに、かくまでも進歩したのは、まさにこのTA・SA軍団の協力があつたからである。彼らは、藤沢から市川まで車で2時間もかけて毎日かけつけて千葉商大の学生を育ててくれたが、その努力が認められて、WIDEの仲間に接続してもらっている。研究上はあまりWIDEに貢献していなくて申し訳ないのだが、WIDEの千葉商大への貢献は絶大なものがある。

何か私たちのようなものにWIDEのようなインターネット研究グループへ貢献するものがあるとすれば、日本のインターネット接続を阻む、NTTを中心とする独占的支配にメスを入れることだろう。これが促進されれば、本号の2論文の問題提起はさらに光るだろう。